

二〇一九年度(平成31年度)

横浜女学院中学校

B 入学試験問題

平成31年2月1日(午後)

国語

注意

- 1 監督の指示があるまで開けないでください。
- 2 問題は、20ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 時間は50分です。

受験番号

氏名

— 次の文章の——線①④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違まちがいを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

① ハガネのような精神を持って仲間を率いているのだと思っていたジャックが、実はとんでもない意気地いきぢなしだとは僕たち
② ちは知らなかった。ジャックにサカ③らうものや文句④を言うものなど一人もいなかったのである。なんと彼はそのまま消息
③ を経ってしまったのである。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。)

石井さん、岡田くん、柳くんやなぎと「私」(白原)は中学三年生で、同じクラスの仲良しグループだ。修学旅行もこの4人グループで行動している。

「私」は小学校のときにいじめられたことが原因で、中学校では自分から進んで何かをすることを恐れ、いっさいの自己主張をせず静かにすごしてきた。一年生の時に岡田くんおかだに「好きだ」と手紙をもらった時も、自分の気持ちをうまく伝えられず、何の返事もできなかった。

修学旅行の最終日、4人は奈良公園にきていた。

「シカ可愛い」

「うん、可愛いね」

「私、シカせんべいって、シカの顔をしたせんべいだと思ってた」

石井さんは私の顔を見て、その後、猛烈もうれつに笑いだした。

「白原さんって面白いねー」

あはははは、と笑いながら石井さんは言う。私も何だかおかしくなって、少し笑った。

石井さんにそんなことを言われると、自分が本当に面白い人間のように思えてくる。全然①そんなことはないのに。

だけどきつと、そんなふう(みりよく)に相手に思わせられることが、石井さんの一番の魅力みりよくなんだろう。だから岡田くんは、いつもあんなに嬉うれしそうにしゃべるんだろう。

公園で食べる柿の葉寿司を、三日間で食べたものの中で、一番美味しく感じていた。広大な奈良公園は良く晴れていて、シカがたくさんいる。ここはとてもハッピーで、あたたかで、ピースが溢れた場所だ。^{※1}

柿の葉寿司を食べ終えた私たちは、しばらくシカと遊んだ。シカは手をかざすと、ぺこん、とお辞儀するけど、せんべいをやらないと怒って突進してくる。調子に乗ってからかっていると、囲まれてしまう。

集まってきたシカを振り切り、私たちは東大寺に向かった。目の前の大仏殿が巨大すぎて、遠近感が狂ってしまったように感じる。

「でけえ」

一番近くまで来てから、岡田くんは声をあげた。

「凄いねえ」

と、石井さんもつぶやく。

「あれ、鴟尾^{※2}」

柳くんが何故だか私に話しかけてきた。柳くんが指さす先を見れば、屋根の上に金色のしつぽが輝いている。

「でけえ！」

中に入ったとき、また岡田くんが騒いだ。鎮座する盧舎那仏はもう大きいと言うのも失礼な感じで、私たちは少し半笑いにお参りする。

「なあ、大仏ってアンドレよりでかいかな？」^{※3}

「あたり前でしょ」

岡田くんと石井さんは、小声で話す。

「こんなの、どうやって作ったんだ？」

「よく見ると横に線があるらしいよ。輪切りみたいなのを積み重ねていったから」

「輪切り？　　つてことは、横を叩けば大仏の背は低くなるってことか」

「なりません。　だるま落としじゃありません」

失礼、と思いつつも、私たちがはくすくす笑った。らほつ、らほつ、^{※4}と言いつつ、岡田くんは柳くんにちよつかいを出す。

殿内を見学し、そのまま右のほうに移動していくと、最後に穴のあいた柱があった。

柱の脇では他校の修学旅行生が騒いでいた。柱の穴は大仏の鼻の穴と同じ大きさで、そこをくぐると無病息災とか、家

内安全とか、とにかく何か御利益があるらしい。

誰がくぐるのかでその人たちは揉めていて、だけどみんな恥ずかしがって、嫌がっている。

最終的には、彼らの中で一番背の低い男子がくぐった。頭を出したところで、彼は少しバタバタして、それでもなんとか抜けだした。その後、その子を囲んで、彼らはぎゃあぎゃあ騒いでいる。その子に触れば、他の人にも御利益があるらしい。

しばらくして柱に近付き、私たちは顔を見合わせた。

「……おれには無理だな」

と、岡田くんは言った。

「おれも」

と、柳くんが言う。

「ここは石井しかないだろう」

みんなの期待を集めた石井さんは、無理、と言った。

「ゼツタイ嫌だ。ゼツタイ無理」

石井さんは太っているわけではないし、くぐれるんじゃないかと思うんだけど、本人は頑なにそれを拒む。無理無理無理、と何度も繰り返す。

「大丈夫だって」

「ゼツタイ嫌だ」

二人は珍しく、しつこく揉めている。私は少しがんで、柱の穴を眺めてみる。穴は角がとれてつるんとしている。

「大丈夫だって。くぐれるよ」

「い、や、だ」

目の前にすると、その穴は余計に小さく感じられた。だけどその向こうには光が見える。何人もの人がくぐり抜けてきた四角い穴の向こうに、何かの象徴みたいに光が見える。

「何でだよ。くぐれるって」

「無、理」

「私が、」

立ち上がった私は言った。

③「くぐってみる」

そのとき時間が止まったような気がした。三人が驚いた顔で私を見つめている。私の大好きな三人——。

この三日間、三人のおかげでとても楽しかった。中学三年になってから、この三人のおかげで、楽しいとか嬉しいとかそういうことを、いくつも感じる事ができた。

「……白原さん、大丈夫なの？」

「うん、やってみる」

柱に向かい、私は膝をついた。四角くて小さな穴にゆっくりと手を当てる。三人が（A）をのむような感じに、私を見守っている。もしかしたら今、私は中学生になって初めて自分から何かをするのかもしれない。

猫、と思った。猫はヒゲが通るところなら、全身すり抜けることができる。私はこのグループを代表する猫になって、この穴をくぐり抜ける。無口な私を受け入れてくれる石井さんや柳くんや、私のことを好きと言ってくれた岡田くんの代わりに、この穴をくぐり抜ける。

穴に手を伸ばしたら、中の空気を少し冷たいと感じた。そのまま頭を差し込めば、閉所の圧迫感に、こめかみの辺りがぞわわあとする。

肘^{ひじ}をつき、肩^{かた}を押し込むようにした。左右にかかる圧力が思っていたよりも強くて、うわー、と声が出そうになる。ちよつと無理かもしれない。これはちよつと、諦^{あきら}めて戻^{もど}ったほうがいいのかもわからない。

四角い穴の底を、舐^なめるような体勢だった。穴の中は想像よりもずっと暗くて、ずつとずつと狭^{せま}い。だけど目を上にあげれば、先に光が見える。

前に手を伸ばし、尺取り虫のように少し進んだ。もう戻れなかった。私^{わたし}はもう、戻^{もど}りたくない。

脚^{あし}の力を使って自分を押しだせば、ところてんになった気分だった。光へ――。少^せしずつ少^せしずつ、私^{わたし}は光を目指して進む。

柱の先に腕^{うで}と頭が出たときは、ちよつと亀^{かめ}みたいな感じだったと思う。体の半分を外に出したとき、ああ、と変な声が出てしまった。光に晒^{さら}されて急に恥^はずかしくなつて、私はもがくように外の世界に出る。

柱の先にいた石井さんが、私の手をとつて、立ち上がるのを助けてくれた。

「凄い、凄い！」

石井さんはまん丸な目で私を見て、手を握^{にぎ}つてぶんぶん^{ぶん}と振^ふった。そのまま私を、ぎゅーってして、背中をばんばんと叩^{たた}く。

「白原さん、凄いねー！」

満面笑みの石井さんは、また私の手を握り、ぶんぶん^{ぶん}と振った。

「さわると福^{ふく}がもらえるよ」

石井さんが上気した声で言った。

近付いてきた柳くんが私の頭に手を伸ばし、ぼんと叩く。岡田くんも、とんとんと私の肩にタッチする。

岡田くんの好意に、言葉も何も返せなくて、ごめんね、って思っていた。思うだけで何もできなかった私だけど、ようやく今日、笑顔を返すことができた。

遠巻きに眺めていた他校の修学旅行生が、私たちに拍手をしていていた。私たちはそちらにむけて、ぺこりと頭を下げる。彼らは笑い、また拍手をしてくれる。

ばんばんばん。石井さんは私のスカートについたほこりを払ってくれた。

「白原さん、凄いなー」

ばんばんばん。

「ねえ、中を通り抜けるのって、どんな感じだった？」

「んー」

と、私は考える。

「ところでんみりだった」

石井さんは一瞬私を見つめ、それから爆笑した。後ろで柳くんと岡田くんも笑っている。

中学に入って初めて私は、自分から何かをぐぐり抜けようとした。その先にはこんな嬉しいことが待っていた。

ばんばんばんばん。

石井さんはまた、私のお尻しりのあたりを払はらってくれる。

嬉⑦しかった。こんなことで、そんなことを思うのはおかしいことなのかもしれない。

だけど私はそのとき、確かに何かをくぐり抜けたんだと思う。

(中村航『あるとき始まったことのすべて』より)

※1 ピース…平和な気分のこと

※2 鴟尾…仏殿の棟木むなぎのはしにつけられたシヤチなどの飾かざり

※3 アンドレ…プロレスラーのアンドレ・ザ・ジャイアントのこと

身長が2メートル23センチあった

※4 らほつ…仏像の丸まったかみの毛のこと

問一——線①「全然そんなことはないのに」(7行目)とありますが、この時の「私」の気持ちを説明したものととして、
適当なものを次の中から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 石井さんはまったく私のことをわかってくれておらず、寂^{さび}しい。

イ 石井さんはいつもこうして人のことを勝手に決めつけて、くやしい。

ウ 石井さんがそう言うとな当にそうかもしれないと思えてきて、悲しい。

エ 石井さんがそう言うとな当にそうかもしれないと思えてきて、嬉しい。

オ 石井さんの人のことをほめてくれる魅力^{みりょく}的なところが、うらやましい。

問二——線②「他校の修学旅行生が騒いでいた」(34行目)とありますが、なぜ「騒いでいた」のですか。20字～25字で

書きなさい。

問三 —— 線③ 「くぐってみる」(61行目)とありますが、「私」が「くぐってみよう」と思った理由として適当なものを次の中から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 石井さんにばかり期待する二人に、「私」の力を認めてほしいと思ったから

イ 石井さんが太っているわけではないけれど、穴は意外に小さく感じられたから

ウ みんなの期待を背負った石井さんが、ゼツタイ嫌だと言い張って「私」に勧めたから

エ 3人のおかげで楽しい学校生活が過ごせたと、もっと楽しみたいと思ったから

オ 「私」を受け入れてくれた大好きな三人のために、自分から何かを試してみたかったから

問四 —— 線④ 「(A)をのむ」(67行目)の空らんに入れた漢字1字を入れて、慣用表現を完成させなさい。

問五 —— 線⑤ 「私はもう、戻りたくない」(78行目)とありますが、この時の「私」の気持ちの説明として、適当なものを次の中から1つ選んで、記号で答えなさい。

ア 穴の先には明るい光が見えているのに、また暗くて狭いところに戻るなんてめんどうだ。

イ 少しずつ一生懸命前進したのに、戻ってまた同じことを繰り返すなんてもったいない。

ウ 中学生になって初めて自分からやろうとしたことを、あきらめずに最後までやりきりたい。

エ 穴の中の圧迫感やこめかみの辺りのぞわわあとした感じをもう二度と味わいたくない。

オ 猫はヒゲが通れば全身すりぬけることができるというのに、自分にできないなんて認めたくない。

問六 —— 線⑥「少しずつ少しずつ」(79行目)とありますが、この様子を比ゆで表現した部分を本文よりぬき出しなさい。

問七 —— 線⑦「こんなことで、そんなことを思うのはおかしなこと」(107行目)とありますが、このときの「私」の気持ちとして適当ではないものを次の中から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 石井さんがお尻のあたりを払ってくれることが、自分のしたことを認めてもらえたようで嬉しい。

イ 代表して柱の穴をくぐったことが、みんなのために行動できたようで嬉しい。

ウ ようやく岡田さんに笑顔を返せたことが、今まで気になっていたことから卒業できたようで嬉しい。

エ 暗くて狭い穴をくぐりぬけられたことが、自分が成長できたようで嬉しい。

オ 岡田くんの好意に言葉を返せたことが、自分の思いを伝えられたようで嬉しい。

問八 この文章の表現上の特徴を説明したものとして、適当なものを次の中から全て選び、記号で答えなさい。

ア 比ゆ表現をもちいて、登場人物の動きをていねいにうつし出している。

イ それぞれの登場人物の気持ちがいねいに描かれている。

ウ 主人公の目につつたことや、感じたことが語られている。

エ 擬態語や擬音語を多くもちいてその場の雰囲気を伝えている。

オ 会話文を織り交ぜながら、人物の対立を描いている。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。)

私は、このダブルバインド^{※1}は、子どもの成長過程で、長い時間をかけた形でも行われてきたと考えている。

少し遠回りな説明になるが、表現教育の現場が抱える問題として、いくつかの角度からこの点を考えてみたい。

日本でも、この一〇年、二〇年、表現教育、コミュニケーション教育ということが、やかましいほどに言われてきた。

しかし、どうも私たち表現の専門家の側からすると、日本のこれまでの表現教育というものは、教師が子どもの首を絞めながら、「表現しろ、表現しろ！」と言っているようにしか見えない。そういう教員は、たいていが熱心な先生で、周りも「なんか違うな」と思っているけど口出しができない。

私は、そういう熱心な先生には、そつと後ろから近づいて行って肩を叩いて、「いや、まだ、その子は表現したいと思っ
ていませんよ」と言っておきたいいつも感じる。

この点が、現在の日本の表現教育が抱える一番の問題点ではないかと私は思っている。いまどきの子どもたちをどう捉えるかの、大事な観点がここにある。

私は一九六二年生まれ、高度経済成長のまったただ中で生まれ育った世代だ。身体には競争原理が、自分でもいやになるほど染みついている。それに比して、いまの子どもたちは、もはや競争社会には生きていない。それは決して悪いことではない。いいことばかりとも言えないけれど、私はどちらかと言えば、「それも悪くないんじゃない」と思っている。第一、日本の社会自体が、すでに成長の止まった社会なのだから、人を蹴落としてまで出世しようとする考え方よりは、限られ

た富をいかに分配して持続可能な社会を作っていくかを考えた方が、社会全体にとってはいいはずなのだ。

私は、いまの日本の子どもたちが、コミュニケーション能力が低下しているとは考えていない。この点はあとで詳しく記すが、もちろん、では問題がないかという点、そうでもない。

まずその一点目が、コミュニケーションに対する意欲の低下という問題だ。

いまの子どもたちは A に生きていないから、コミュニケーションに対する欲求、あるいは必要性が低下しているのではないか。

私はこのことを、「単語で喋る子どもたち」という言葉で説明してきた。

昨年、小学校の高学年、あるいは中学生になっても、単語でしか喋らない子どもが増えている。喋れないのではないのだ。

そもそも子どもは、幼児期には単語でしか喋らない。それが成長するにつれて、他者と出会い、単語だけでは通じないという経験を繰り返して、「文」というものを手に入れていく。この言語習得の過程が崩れているのではないかという危惧がある。

たとえば、兄弟が多ければ、「ケーキ！」とだけ言ったところで、無視されるのが関の山だろう。しかしいまは少子化で、優しいお母さんなら、子どもが「ケーキ」と言えば、すぐにケーキを出してしまう。あるいは、もっと優しいお母さんなら子どもの気持ちを察して、「ケーキ」と言う前にケーキを出してしまうかもしれない。

子どもに限らず、言語は、「言わなくて済むことは、言わないように言わないように変化する」という法則を持っている。

「ケーキ」をどうしたいのかを聞かずにケーキを出してしまつては、子どもが単語でしか喋らなくなつてもしかたない。

繰り返すが、単語でしか喋れないのではない。必要がないから喋らないのだ。「喋れない」のなら **B** の低下だが、「喋らない」のは **C** の低下の問題だ。

これは一義的^{※2}には、まず家庭の問題だろう。「ケーキ、ケーキ」と繰り返す子どもには、父親、母親が「**D**」と聞いてあげなければならない。あるいは、「お父さんやお母さんはわかるけど、それじゃあ他の人にはわからないよ」と言つてあげなければならない。

しかしこれは、もはや家庭だけの問題でもない。

学校でも、優しい先生が、子どもたちの気持ちを察して指導を行う。クラスの中でも、いじめを受けるのはもちろん、する方だつていやなので、衝突^{しょうとつ}を回避^{かいひ}して、気のあつた小さな仲間同士でしか喋らない、行動しない。こうして、わかりあう、察しあう、温室のようなコミュニケーションが続いていく。

あるいは、以下のような問題もある。

③ 全国を回っていると、小学校一年生から中学校三年生まで三〇人一クラス、^{くみが}組替えなしといった地域がたくさんあることに気がつく。こういう^{かんきょう}環境で、熱心な先生が、表現教育を行おうと張りきつて、

「さあ、今日はスピーチの時間です。太郎君、前に出てきてください。先生もみんなもよく聞いているからね、三分間、何喋つてもいいですよ」

と言うわけだが、これではスピーチは成立しない。なぜなら、太郎君以外の二九人は、もう太郎君のことをいやという

ほど知っているから。太郎君も、いまさら話すことなど何もない。少子化がボデイブローのように効いて、子どもたちから表現への意欲を奪^{うば}っていく。

表現とは、他者^④を必要とする。しかし、教室には他者はいない。

わかりあう、察しあうといった温室の中のコミュニケーションで育てられながら、高校、大学、あるいは私の勤務先のように大学院生になってから、さらには企業^{きぎょう}に入ってから、突然^{とつぜん}、やれ異文化コミュニケーションだ、グローバルスタンダードの説明責任だと追いつ立てられる。

繰り返す。子どもたちのコミュニケーション能力が低下しているわけではない。しかし年々、社会の要求するコミュニケーション能力は、それを上回る勢いで高まっていつている。教育のプログラムは、それについて行っていない。

子どもたちは、このギャップを敏感^{びんかん}に感じ取り、大人になることを嫌^{いや}がってしまう。もちろん、大多数の子どもたちは、55
どうかそこは折りあいをつけてうまくやっていくのだろう。しかし、少し心の弱い子は、引きこもってしまったたり、ニートになってしまったり、あるいは心を病んでしまったりする。それらは決して、その子の努力が不足していたとは言いきれない側面が多々ある。だって、優しい先生も、優しいお母さんも、異なる意見を持った人とうまくつきあっていく方法なんて誰^{だれ}も教えてくれなかったのだから。みんなわかってくれたのだから。

そのような環境で子どもを育ててしまった以上は、その子どもたちが「^⑤どうして、みんなわかってくれないの？」と感^{あま}じてしまうことを、単純に甘えだと切り捨てることはできないだろう。

これもまた、時間をへた「ダブルバインド」とは言えまいか。

(平田オリザ『わかりあえないことから——コミュニケーション能力とは何か』より)

- ※1 ダブルバインド…二つの反対の内容の命令をして、相手にストレスをかけるコミュニケーションのこと
- ※2 一義的…まずはじめに取り上げるべきであること
- ※3 ボディブロー…ボクシングで打撃だけきをすること

問一——線①「この点」(2行目)とはどのような点ですか。「点」につながるように、36字でぬき出し、始めと終わりの5字を答えなさい。

問二——線②「教師が子どもの首を絞めながら、『表現しろ、表現しろ!』と言っているようにしか見えない」(4行目)とありますが、どのようなことを言っているのですか。説明として適当ではないものを次の中から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 教師が、表現の重要性や意味、方法を正しく理解しないで、ただ熱心に子どもに表現をさせようとしてしまっていること。

イ 教師が、子どもの持っている表現したい気持ちを無視して、むりやりに内容を表現させようとしてしまっていること。

ウ 教師が、子どもに表現をするように促しながら、一方で子どもに自由な表現ができないように縛り付けていること。

エ 教師が、単語だけで十分な表現をしている子どもを否定してしまうことで、かえって表現できなくしてしまっていること。

オ 教師が、子どもが表現したいという気持ちを持ってない原因を理解しないで、ただむやみに表現を促してしまっていること。

問三 A (19行目) にあてはまる5字以内の言葉を、本文からぬき出して答えなさい。

問四 B (32行目)、C (33行目) にあてはまる語の組み合わせとして、適当なものを次の中から1つ選び、記号で

答えなさい。

ア B 関心 C 意欲

イ B 能力 C 意欲

ウ B 意欲 C 水準

エ B 関心 C 能力

オ B 水準 C 能力

問五 D (34行目) にあてはまる内容を書きなさい。最後に「？」をつけなさい。

問六 ——線③「全国を回っていると、小学校一年生から中学校三年生まで三〇人一クラス、組替えなしといった地域が

たくさんある」(42行目)とありますが、このような状況をもたらしているのは何ですか。本文より3字以内でぬき出して答えなさい。

問七 —— 線④ 「他者」(49行目)とはどのような人ですか。10～15字で説明しなさい。

問八 —— 線⑤ 「その子どもたちが『どうして、みんなわかってくれないの?』と感じてしまうことを、単純に甘えだと切り捨てることはできないだろう」(60行目)と筆者が考える理由を50字以内で書きなさい。

問九 —— 線(53行目)とあるが、あなたはどのようなことを目的とした、どのような教育プログラムが必要だと考えますか。100字以内で書きなさい。